

---

# Paganism.Heretic.

FORNEUS

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Paganism・Heretic.

### 【Nコード】

N1950Z

### 【作者名】

FORNEUS

### 【あらすじ】

俺は誰の指図も受けない。俺のやりたいようにやる。それが、破壊に向かっても・・・。  
つてなわけで原作の平行世界スタート！  
一誠の性格改変、原作ブレイクものです。あと、R-18スレスレです

## Life・1

### Side一誠

俺の名は兵藤一誠。周囲の輩にはイツセーだのなんだの言われている。

他校の生徒すら俺の事を知っている。

例えば、今とか……………

「お前、イツセーだろ？ココらは俺様のテリトリーなんだよ。調子くれてんじゃねえぞ？やっちまえ！」

他校の生徒に囲まれたりしてな？

「適当に遊んでやるよ……………。モブキャラ供が」

「舐めてんじやねえ！」

どうやら、最初の犠牲者はコイツらしい。

前から突っ走ってくる他校生の顔面に右ストレートをお見舞いする。

「ぐあぁ……………」

呻き声をあげる他校生の腹に脚を乗せて踏みにじる。グチャグチャと内臓の潰れる音がする。

……なんか、愉しくなってきたぜ！

「ヒイツ……！？」

「無理だ！？………こんなの敵うわけがねえ！」

「逃げるぞ………！？」

オイオイ………逃がすわけねえだろうが？

「さあ、死な無い程度に砕け散れ」

「 次のニュースです。昨夜未明、 高校の二年生4人が路地裏で発見されました。4人の内の1人は内臓破裂残り3人は全身複雑骨折で病院に搬送されました」

全く、物騒な世の中になったもんだなあ？

「おっと、もう8:30か。そろそろ学校に行かねえと」

つー訳で学校に着いた。え？速い？知るか、んなこと  
ああ、早速眠い…………… z z z

「あ、あのお……………」

うーん……………。

誰だ、俺の眠りを妨げる奴は？朝から自殺志願者か？  
命は大切にしろよなあ……………

「あのお……………」

目をこすって声のする方を向くと

黒髪が艶々でスレンダーな女子が俺の席の前にいた。

「やあ、おはよう。何かようかな？」

え？変わり身が速い？そりゃ、美少女と話をするんだから、ちゃんとした姿勢で臨まないとな。

「わ、私と付き合って下さい！」

顔を赤らめながら彼女はそう言った。

「なんでこんな美少女がイツセーの彼女なんかにいいいい！」

「世の中のシステムが反転したとしか思えない……。イツセー、まさか何かの弱味でも握られているのか？」

なんて声が外野から聴こえる。

ああ、ウゼエ……………

まあ、負け犬の遠吠えってやつだな。ザマア

そんなこんなで浮かれたまんま授業が終わった。

え？デートの約束？……………したに決まっておるうが！

日曜日〜日曜日〜

「ケタケタケタケタケタケタ……………」

「あ？」

変な声が聴こえると思って後ろを振り向くと、明らかに、気違いな声をあげる上半身が裸の女、下半身が巨大な獣という出で立ちの人外の化物としか思えない異形がいた。

……………俺の気分を害した罪は重いぞ？

「『迷宮絲』！」

地表から絲が這え出て人外を拘束する。

「さあ、哭き叫べ」

グチャツッ！！

俺の放った右手は奴の肋骨を難なくへし折る。

「ギア…アア……………」

「オイオイ、まだこんなの序の序の序の口だぞ？」

更に右、左、右、左……………と拳を打ち込み人外の身体を变形させていく。

「コ、コロ…………セ」

「馬鹿いうな。まだまだ死なせてやんねえよ」

俺は心臓や脳を避けながら骨を砕いていく。手に血がこびり付く。

……………人外でも赤い血の奴がいるんだなあ？鉄の匂いもする。

殴り過ぎて内臓が飛び散ってるなあ……………

ズブツッ！

「じゃあお前、コレを握り潰せよ」

俺は人外の腹からドクドクと鼓動する心臓を傷付けないように抉り出す。

自分の手で終わらせてあげようというんだ。俺、優しいだろう？

「ホラホラ、さっさと潰せよ。嫌なら俺が潰させてやるよ」

「！？」

人外の腕を引き抜く。辺りに血が飛び散るが気にしない。ソレを手で持って

グチャッ！

そのまま握り潰す。

………脳が生きてるかも知れないから潰すかな？

右手に力を込めて頭蓋骨を砕く。

液体がスゲエなあ？脳漿か？

取り敢えず砕けた頭蓋骨を真つ二つに開いて脳を引っ張り出し脳を壁に投げつける。

暫くすると、人外の身体は霧のようになり消え去った。  
跡に残るのは、充滿した血の匂いと飛び散った血の痕だけだった。

ふう、遊びすぎたかなあ？血の匂いが染み付いてるなあ……  
さっさと帰って風呂入って寝よ。

S i d e O u t

## Life・2

### Side一誠

ヤッファー！ヒヤッハー！

…………… すまない、少し取り乱した。

何はともあれ今日は日曜日！そう、デートだ！

彼女の名前？まだ言っただけだったか？

天野夕麻っていう名前だ。

取り敢えず、三時間前に待ち合わせ場所に行っておこう。

てな訳で三時間後だ

「ま、待ったかなあ？」

「いや、俺も今来たところだよ」

男なら一度は言ってみたい言葉を言えませ！

それから、2人で街でうろついたり、絡んできた不良を再起不能にしたり、追い掛けてくる人外の気配を避けたりした。

いやあ、なんかもう満足です。家族に看取られながら老衰で死ぬく

らい。

後二つには些か腹が立つが……。

そんなこんなで、夕暮れ時になり、今は町外れの公園にいる。人が無いなあ……？まあ、ありがたいが。

「ねえ、一誠くん」

「ん？なんだい？」

「私たちの記念すべき初デートだから、一つお願いしてもいいかな？」

「ああ、いいよ」

「あのね……死んでくれないかな」

夕麻ちゃんはうつすらと涙を浮かべながら言った。

ズブツ！

俺の腹に何かが突き刺さる。

……これは…槍？

「ゴメンネ、一誠くん……」

「遅かったみたいね……。私の領地でこんなことをして赦される  
と思っているの？」

さっきまで、撒いていた人外が俺の前に姿を現した。  
現れた人外は血のように紅い髪をした女だった。  
まともなカタチの人外もいるんだなあ？

「喰らいなさい！」

人外は手の平から巨大なドス黒い球体を造り出す。  
オイオイ、そんなもんはファンタジーの世界だけにしてくれよな？

「させるかってんだ！」

「え？」

俺は絲を片手から出し、夕麻ちゃんを抱き抱えながら、近くの電柱  
にくくり付ける。

「ッ！？神器！」

どうやら人外は驚愕しているようだ。セイ、何だ？良く分からんがココから離れんのが得策だろう。

取り敢えず撒けたかな？

S i d e O u t

S i d e タ麻？

私はどうしたらいいのかなあ？

上からの命令で、神器を宿す、危険因子を始末するようにならされた。いた。

今回は、神器を保有している人間の一人誠くんを殺すように。だから人気の無いところで始末するためにデートという大義名分であの公園に呼び出すことにしていた

だけど、私は彼の事が本当に好きになった。  
そして、遂にあの公園にたどり着いたの。  
私はイツセーくんを殺そうとして光の槍で貫いた。  
だけどそこに紅髪の悪魔が現れて、私を消滅させようとしていた。  
もう、いつそのことココで彼と一緒に死のうと思っていると、彼は  
自分を殺そうとした私を抱き抱えて……………。

Side Out

Side 一誠

イテテテ……………。  
つか、コレは死ぬんじゃないかな？意識が朦朧してるし、出血  
凄しい。まあ、美少女に殺されんならそれも本望ってか？

「ゴメンネ、ゴメンネ……………」

夕麻ちゃんが、泣きながら俺の腹の傷の当てを始める。

「別にいいよ。だから、泣き止め、な？」

「ココじゃ応急手当でしかできないから、私が住んでいる所に行くね」

夕麻ちゃんはそういつと、背中から黒い翼を生やして今度は俺を抱き抱えながら空へと飛び立った。

ココは教会か？十字架あるしな。ただ、磔になっている聖人の彫刻の頭部が破壊されてるのは如何なものか？

「コレでなんとか……………」

どうやら、俺の手当ては大方終わったようだ。

「ありがとう」

「ごめんなさい……………。私のせいで」

「その話なんだが、詳しく教えてくれないか？」

俺は何度か人外を殺したことはあるがソレが何なのかは良く知らな

かった。

「うん。説明するね……………」

ココでソレを聞いていなければ何も始まらなかったのかも知れない。

S i d e O u t

## Life・3

### Side一誠

「私は墮天使なの。もともとは神に仕える天使だったけれど、墮天使として地獄に落ちた存在……………」

墮天使？まあ、さつき黒い翼が生えてたしなあ？

「さつきの女は何だ？墮天使とはまた別の何かだったか？」

「アレは、悪魔……………。冥界で太古の昔から争っている勢力よ。墮天使は人間を操りながら、悪魔は人間を唆して契約しながら互いに滅ぼし合っているの……………」

成る程なあ……………。

「俺を殺そうとした理由は何だ？」

「私は……………あなたを殺したくなんて無かったの……………。だけど、上からの命令で神器を持つ、墮天使に危険をもたらす者を殺せって……………」

夕麻ちゃんは俯きながら言う。

神器……………さっきの悪魔の女も言っていたよなあ？

「なあ、神器って何だ？」

「神器は特定の人間に宿る規格外の力。大体は人間の社会でしか機能しないけれど、中には私たち墮天使や悪魔、天使の存在を脅かすほどの力を持った神器もあるの……………」

「コレとかか……………？」

俺は右手から『迷宮絲』を放つ。コレが神器だったのか？

「危険要因つてのが神器を宿した人間つてことか……………」

「ごめんなさい……………。謝って許してもらえはすが無いけど、それでも……………」

「許すよ」

「え……………？今、なんて……………」

「だから、許すっていつてんだよ」

「わ、私はあなたを殺そうとしたのよ……………？」

「お前の意思ではなく、上からの命令なんだろう？なら、お前を責めようとは思わない」

「あ、あ……………うう……………」

「アレ？俺、何か悪いこと言ったか？」

「な、泣くなよ！？……………な？」

「ありがとう、ありがとう……………」

泣き止んでもらわないと困るな。取り敢えず、撫でてみよっかな？

「一誠君……………//」

お？泣き止んだ。よかったよかった

「なあ、俺が墮天使に協力すれば危険因子として、墮天使からの抹殺対象にならないんじゃないか？」

「うん。だけど、いいの？命の危険に晒され続けることになるんだよ。」

どうやら心配してくれているようだ……

「いや、俺は二日に一回くらいのペースで吸血鬼みたいな人外と交戦したりしてるから、たいして変わらないよ」

アイツら倒しても倒しても大元みたいな強い奴を殺さなきゃ根絶できなからなあ……………

「ところで、君の本当の名前はなんだい？“天野夕麻”は偽名だろっからな」

「そうだよ……。私の本当の名前はレイナーレ」

レイナーレ……。いい名前だな。

「では、レイって呼ばせてもらおう」

「うん、ありがとう」

「ああ。それで、具体的に俺は何を手伝えればいい？」

俺が、レイに聞くと同時に

「レイ……ナーレ様……。！悪魔が……。仲間がフリードを残して全員……」

急にドアが開いたと思うと、血塗れになった神父が血を吐きながら絶え絶えに言う。

「俺がソイツの救援に行こう。詳しいことを教えてくれ」

「一誠くん……。今、私の所に回ってきた部下の『はぐれ悪魔  
被い』のフリード・セルゼンが悪魔……。さつき私を殺そうとした  
存在と闘っているの。彼の救援に行ってくれないかな？」

悪魔被い……。？アレか？映画とかで悪魔を滅してる奴……

「了解だ。フリード・セルゼンについて教えてくれ」

「うん。フリードは白髪で言動がちょっとおかしいかも知れない…  
…。

もし、一誠くんが危険になったら、すぐに、戻ってきてね……。？」

レイは俺の前に円状の何かを出現させる。

これは……。魔方阵か？

「ああ、大丈夫だ。行ってくるよ……。レイ」

魔方阵の中へ入ると周囲が光に包まれた

「絶対に帰って来てね？一誠くん……」

S  
i  
d  
e  
O  
u  
t

## Life・4

### Side一誠

……………着いたのか？

凄いなあ。まるでファンタジーの世界だ。

「悪魔の分際でえ、チヨーシくれてんじゃね でござんすよ。死ね  
死ね悪魔〜！死ね悪魔〜！死んじまえい！！」

アレがフリードか……………。確かに言動めちゃくちゃだなあ？

「お前がフリードか？」

「あ〜あ〜誰だよ俺の名前を呼ぶ奴は？」

色々とおかしいが面白れえなあ？見てる分には…………、だ。

「救援に来た。ソイツらが悪魔とかいう人外か？」

「そうだよ、そうだよ、そうざんす。アイツら、クソな クソ悪魔  
く デビルな輩をぶった斬りく 一緒に殺っちゃおうZE!」

「コツチ半分は俺が貰う……………」『迷宮絲』!」

手始めに近くにいた悪魔を一体取り抑える。

「わーお！神器ちゃんじゃあーりませんか！うんじゃくそれじゃく  
お委せしますZE!」

俺は取り抑えた悪魔を『迷宮絲』ごと引き寄せて、その腹部をズボ  
ンの右ポケットから取り出したナイフで突き刺す。

「ギアアア！？人間風情があ！」

ああ、ウゼエ……………。取り敢えずもつと刺すかな？

腹部に突き刺したナイフを勢いよく引き抜き、両目を抉る。

「キサマア！エルピスを離せ！」

そういえば、コツチにも3匹位いたよな…………。。  
仕方がない、さっさとコイツを殺すでしょうかな？

「悪いなあ？もうちょっとゆっくり殺そうと思っていたが、すぐに終わらせてあげるよ」

ハア、勿体ないなあ。せつかく法律に縛られない殺しができたのに……。  
ドスッ！という音と共にナイフを心臓に突き刺す。血が噴き出して、スプリングラーのようだな。

「次は誰だ？死にたい奴から前に出ろ」

「オマエエツ！？」

おいおい……。3匹一気にか？

「『迷宮絲』」

掌から糸を放って一匹の首を締める。……割と容姿のいい女の悪魔だな？

「ひい……！？イヤ……」

「オマエは後でゆっくりと殺してやるよ。」

今、手から出している糸を近くにあった木にくくり付ける。

「お前ら二匹はすぐに殺してやるよ」

俺はそこら中に糸を張り巡らせ、その糸の中で、悪魔2匹の近くにある糸を糸鋸のように動かして首をじっくりと切断する。

「さようなら、永遠に」

一気に首を切断し、辺りに張り巡らされた糸を二匹に向けて締め上げる。スパスパと人の形をしていた肉体は、欠片となって飛び散る。返り血が酷いな……。風呂入りてえ。さて、一匹残して片付いたなあ？

「おい、フリード！片付いたか？」

呼ぶと、俺同様に返り血で血塗れなフリードが姿を表す。

「はいはい、終わりましたよ、光の刃で首をチョンパして、銃でドタマを必殺必中フォーリンラブしてくれやがりましたぜえ〜？」

さてさて……

「お前、透明になってないで、姿見せろよ人外が」

何か、さつきから視線を感じるんだよなあ？

「ホオ、人間ごときが俺様の透過を見破るとはな？」

「わーおー！しゃらくせえ！」

「黙れ人外。人外ごときが偉そうに喋るな」

「フン、格の違いを見せてやるっ」

人外は装飾剣を俺に振りかざす。おいおい、銃刀法違反だぜ？法律は守れよな？

ああ、人外には適用されないのか。

「フリード、武器を貸してくれ。このナイフじゃ決定打は与えられねえ」

アウトドア専門店買ったナイフじゃなあ？

「予備用の光の刃をかしてやっちゃおうよ！ホイ、覚悟はOK？」

「いわれんでも大丈夫だ」

これは……剣の柄か？刃はどうやって出すんだ？取り敢えず力を込めてみるとしよう。

ブウウン！という音を立てて柄から光の刃が形成される。

何か、ビームサーベルみてえだな……。まあ、これならコイツも解体できるだろう。

「さあ、哭き叫べー！」

Side Out

Side一誠

「見えなかるう。喰らうがいい！」

悪魔は刀身を透過しその不可視の切っ先で俺とフリードに剣閃を放つ。

風王結界ってか？全く厄介な奴だなあ？おい。

「おっと、危ねえ」

鋭い一撃が俺を襲ったが、間一髪でフリードから借りた光の刃で防ぐ。  
よし、奴の隙を作れた。任せたぞ……………

「フリード！」

「ひゃっほう！死ねよ！」

間髪入れずにフリードが横合いから光の刃で斬り込む。

「ガハツ……………！？たかが人間2人ごときにこの俺様が！？」

悪魔は憤怒の表情で俺たちを睨む。その刹那、俺の視界に靄がかか  
る。一体どうしたんだ？フリードを見ると、吹き飛ばされ、血塗れ  
で倒れている。アイツがやられた……………？

更に、腹部に違和感を覚え、見ると血がダラダラと垂れ落ちて滴り、  
血の池を作っている。

コイツは致死量って奴だな。放って置けば間違いなく死ぬ。

お前はこの程度で死ぬ気か？面白くないな。実につまらない。

なんだあ？頭に男の声が響く。目を開けると、黒い空間に紅黒い光  
が浮かんでいた。

死ぬ？ケツ……………！お断りだったの。

フン！やはり面白い。封印されてからの輪廻……………悠久の暇は  
我にとっては些か退屈が過ぎたが、やっとできた我が娯楽を見す見  
す手放すには忍びない。

ああ？封印だあ、娯楽だあ、知らんがテメエは神器ってやつだろ？  
なら、力を寄越せよ。

ハハハ、善かろう。精々我を楽しませることだな？異端を継ぐ者よ……………

目が覚めると、俺の視界は靄が晴れてクリアになり、腹部の傷は痕すら遺さずに消えていた。もう一つ、変化があった。さっきまで素の状態であった肘から手首にかけては、黒い籠手が覆う。

「何だ？その籠手は。それで俺を倒せるとでも？」

「知らねえが……………、俺を斬った罪は重いぞ？」

取り敢えず俺は、悪魔の前へ歩を進め、黒い籠手を嵌めた右腕で殴る。

「な、何！？貴様、人間の分際で魔力を制御する……………だと？」

ふと、右腕を見ると紅黒いオーラのような物が覆っている。魔力の制御？この神器のせいかな？

「だが、俺様が負けるわけがない！」

悪魔は再び見えない剣閃を俺に放つ。

そう何度も掛かるわけがねえだろうがよ、人外！

「『迷宮絲』！」

前方に掌から絲を放つ。

「幾ら見えなかつたが」

絲は悪魔の付近を縦横無尽に駆け巡る。

「その実体は常に有るんだろうがぁ！」

絲は不可視の剣を絡め捕える。

俺は絲に力を流し込むイメージをする。すると、籠手から紅黒いオーラの奔流が絲を伝って悪魔に流れ込む。まるで、ワイヤーを走る電流のように、だ。

「ガアアアアッ!？」

さっきの分、返さしてもらうぞ、人外！  
俺は光の刃に黒い籠手から発せられるオーラを纏わせて、悪魔の装飾剣を持つ右腕を切り落とす。地面に落下した腕は徐々に灰になっ  
ていく。

「き、貴様ア……！俺様を誰だと思っ  
ていやがる……！！」

虚勢を張る人外を気にも留めずに、光の刃で至るところを抉り、また、変形させていく。光の刃で斬られた箇所は灰になるようだな？  
悪魔とかいう人外は。良いことを思い付いた。

「『迷宮絲』」

絲を地上から生えさせて、地面に伏している悪魔を地面に縛り付ける。  
更に、別の絲を木にくくりつけて、光の刃を絲で巻く。その絲の先を悪魔に巻きつける。光の刃が悪魔と平行な空間に垂直に固定される。

「キサマア……！何を  
するつもりだ……！！」

「ギロチンのな？」

糸を切る。すると、光の刃は真っ直ぐに悪魔の首を切断する。残った体と首は、自然消滅するだろう。それより……

「フウ、終わった終わった……」

「バツッ！」と音を立てて地面に倒れる。神器のあった肘から手首にかけては素の状態に戻る。どうやら、反動のようだな……。俺は意識を手放した。

S i d e O u t

Side一誠

うっあ〜………………。ああ？

どうやら寝てた見てえだな………………。ところで、俺は何でベッドの上にいるんだ？

不思議に思い、横を向くと

何でレイが寝てるんだ……………！？

「うう………………。あ、一誠くん起きたんだね？」

「ああ

「大丈夫？痛いところはない？」

怪我……………アレ？治つとる！？

悪魔に装飾剣で貫かれたはずの腹部の傷は完全に消えていた。

「なぜか傷が治っているから痛くはないが、なぜ治ってる？」

「コレの力なの……」

レイは手のひらを翳すと緑色の淡い光が発せられる。  
これも神器なのか……？

「コレは『聖母の微笑み』……。人間だったお母様の形見よ……」

形見……？

「そんなことより、お腹空いてないかな？」

ああ……。そういや、昨日の昼から飯を食ってなかったなあ？

「正直、腹ぺこだ」

「じゃあ、すぐに作るね？」

そういつて、レイは足早に部屋から調理部屋に向かった。

レイの過去……。俺には到底考えが及ばない。

まあ、答えの出ない思考は、一旦置いておくとして、だ。  
俺のあの神器………………。どうやら、内包された意思を持っているよ  
うだったなあ？  
あの透明マニアの言っていた通りならば、コレは魔力とやらを制御  
できるんだろつ。  
だが、その魔力の行使とやらをすると、反動で動けなくなっちまう、  
と言っわけか……………。  
何か、あまり使わねえ方がいいかもしれんな。

「一誠くん！ご飯できましたよ」

お、レイの手料理だ！ラッキーだ。女の子の、それも美少女の！

「いただくよ」

うまい……………。すごくうまい。涙が出そうだ。  
特に、味噌汁が心に染みる……………。

「そんなにがつつかなくても、誰もとらないよ？」

だって、うまいんだもん！

ん？何か忘れてる気がしてきたぞ？

……………あ、フリードだ。

「そういえば、フリードはどこに居るんだろうか？」

「私が、一誠くんの様子を見に行った時には、もういなかったよ？」

まあ、アイツは死ななそうだから大丈夫だろうな……………。

「まあ、アイツはその程度じゃ死なないだろう……………」

「そつだね……………」

あ、遠い目をしていらっしやる。何か、人の心が分からないってよく言われる俺でさえも気持ち分かる気がする。

「ところでさあ？何で此処は……………こんなに荒廃しているんだ？」

天井には所々ひびが入りいつ崩れてもおかしくない。某劇的な前後に依頼したいくらいだ。

「それはね……………、ココは天使側が放棄した教会だからなの……………」

つまり、無断で使っていると……………。

「俺の家に来ねえか？親はいないし大丈夫だぞ？」

「ここよりは遥かにましだと思っただがなあ？」

「え、いいの……………？」

「ああ、「ここじゃあまともに暮らせないだろう？」」

「あ、ありがとう！」「誠くんと同じ家……………同棲……………／／／」

あらら……………。何かトリップしちゃまってんなあ？

まあ、可愛いから良いんだがな！

つー訳で、俺の家にレイの荷物を運んでいるんだが……………。

「凄い…大きい……………家だね？い、一誠くん……………」

何か、唾然としていると言つか呆然としているというか………とにかく、そんな表情をしてい。

ま、そうなるさなあ？そりゃあ、この街、最大の豪邸だからねえ………。

「そんな顔をして、俺の家なんだからしょうがないだろ？」

俺はそれだけ言って気にせず、とつとつ、荷物を運ぶことにした。

S i d e O u t

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1950z/>

---

Paganism.Heretic.

2011年12月20日00時53分発行